

た頁に、「オレハ日本ノ兵隊ダ、大日本帝國萬歳」と大きな字で書いた。それから汚れた髯面に安心をしたやうな微笑をうかべた。

日本兵が通るのを見て、聲をかけたが、かすかにしか聲が出ず、そのまま見送つたこともあつた。それは騎馬斥候であつたが、穴の中にもた白川一等兵は、遠くの方で、その土橋を右に廻れ、とどなる聲をきいて飛びあがつたのである。百五十米くらゐ離れた道路上に、四人の日本兵がゐるが、力のつきた白川一等兵は穴から身體をあげることができず、飛びださうとして、かへつてはげしくあふむけに引つくりかへつた。蹄の音が遠ざかる氣配にあわてて、また穴から首を出し、おうい、おういとどなつてみたが、まるで、すうすうとかすれた息が出るだけで、咽喉が破れるやうに痛かつた。騎馬斥候はまつたく氣づかず、五十米くらゐ先行してゐた二騎が土橋を右に迂回して丘陵にわからなくなり、後の二騎は土橋のところから左に迂回して、竹林の中に入つてしまつた。白川一等兵はそれを見送つてゐるが、氣が

抜けてへたばつてしまつた。

すると、しばらくしてまた蹄の音がしたので、あわてて首を出してみると、それは支那兵であつた。戦線はいつたいどうなつてゐるのか、さつき日本の騎兵が入つた竹林のかけから、その三人の支那騎兵は出て來たらしく、どうして出あはなかつたのか不思議に思はれた。しかし、そんな不審のわいたのはあとで、白川一等兵はおどろいて首をひつこめたのである。さつき日本兵を見たときには、もう日本軍のありかが近いと思つて心が明るくなつたのだが、また支那兵が出て來たのを見ると、なにがなにやらわからなくなつた。銃聲が二三發遠くで聞え、あわただしく鐵蹄のひびきが遠ざかつてゆくのが聞えた。すると、さつき、自分がうれしさのあまり、穴から身體を出してどなつたのを、どこか、ほかの方面から見られはしなかつたかといふことが不安になつて來た。銃を身がまへて待つたが、それからあたりはしいんとなつた。

夜になると、遣ひだしていつた。六日目の晝、驟雨がなぐりつけるやうに過ぎた。

ちよつとの間で、また、照りつける暑さになつた。もうほとんど無意識のやうになつた白川一等兵は、夜になると疲勞の極に達しながらも、掛聲のやうに、兵隊だぞ、兵隊だぞ、と呟きつづけながら、爬行をつづけていつた。臉がしだいに合はさつて来て、何度も、そのままぐつたりと路上にたふれてしまひさうになる。もはや背囊の重味にたへてゐることができず、身體を横にして、肱で土をかき、喘ぎながら、一寸ずりに身體をはこんでいつた。

應城からすこし出たところにある歩哨線で、歩哨に立つてゐた兵隊が、闇の中にごめくものを見つけて誰何したときには、白川一等兵はもう全く眼をあけてゐることもできず、口もきけず、でれりと口をあけたまま、あ、あ、と涎ばかりをたらしてゐた。歩哨の兵隊が近よつて肩に手をかけてもわからず、無意識のやうに横だふしのまま、すこしづつ身體をずらせてゐるのだつた。歩哨の知らせによつて二三人の衛兵が出て來た。一人が、白川一等兵の銃をとつてやらうとしたが、しつかり

と握つたままどうしても離さなかつた。まるで鋼鐵の環をはめたやうに、白川一等兵の右手は銃にまきつき、他の兵隊が一本一本はづしてやつと銃をとることができた。背囊を外し、装具をとつて裸にしてやつた。白川一等兵はときどきうつろな眼をあけるがなにも見えない様子だつた。看護兵が呼ばれ、醫務室にかつぎこまれた。いくらか正氣づくくと、彼は氣狂ひのやうな叫び聲を立てて立ち上らうとした。皆が押へつけると、銃は、劍は、服は、背囊は、と、一語一語喘ぐやうにいつてけたたましく泣きはじめた。瘦せて眼の落ちくぼんだ白川一等兵はばりばりと齒を噛んでゐたが、力つきたやうにぼつたりとたふれた。その騒ぎに別の病室からもなにごとであらうかと兵隊がのぞきに來たが、そのなかの一人が、知つてる者がゐて、九十番目の兵隊ぢやないかとおどろいて叫んだ。その兵隊は負傷して後送されてゐたのであるが、同じ隊であるにもかかはらず、變りはてた戦友の姿に、それが白川一等兵であることをしばらく氣づくことができなかった。まったく逆上してゐる白川一等兵はもうなにをいつても通ぜず、鎮靜劑をのまされると、やがて靜かに眠つた

が、それから、全く覺えずに、まる三日眠り通したのである。昏々と死んだやうになつて眠りはじめると、名物の軒もかかず、なにも食べようともせず、ただ眠つた。元氣をすこしづつ回復して來ると、しだいに軒をかきだした。

私は宜昌作戰に従軍したときに、この鈍重な白川一等兵と二晩ほどいつしよに過したことがある。よくものを取り落すので、上官からおこられてばかりゐた。白川一等兵は大きな圖體をだるさうに動かしながら、私のところへ食事をはこんで來てくれた。さうして、あるとき、ほつりほつりとした話しぶりで、彼が山岳地勢でひとり残り残されてからの一週間の話を私にしてくれたのである。彼はそのことがあつてから後、いつそう動作が緩慢になつたといふことであつた。そして、このおどろくべき兵隊が一週間のあひだに経験したことの眞の意味はあまり理解されず、相かはらず戦友たちからその鈍重さをなぶりものにされてゐた。私は白川一等兵と別れて一年半になるが、まだ、中支戦線から歸つて來ない。私は彼の留守宅を訪問し

たが、彼の息子の久吉はいつたん降りた學校にまた通つてゐる。成績もよいさうだ。白川一等兵は私によく便りしてくれるが、最近のたよりには、今度は年功でいよいよ上等兵になるかも知れぬとうれしげな調子で書き、上等兵のことを書いたその便りにかぎつて、自分の名前のかはりに「九十九番目の兵隊」と書いてあつた。

朝

空はまだまつ暗だ。東の方の底がやや白みかかつて、凹凸のはげしい町の屋並のうへをほのかに横に掃いてゐる。研吉は裏の井戸端で顔を洗つてゐた。納屋の横の竹戸をあけて、植木屋の花石が泥だらけの手をもみながら入つて來た。

「若大將、スコはござすめえか」

研吉は顔を金盥につつこんだまま、

「スコ？」

「へえ、スコをお借りしたいのですが」

「スコた、なんですか」

花石はどきまぎして、

「スコボ、ち、いひますかな」

「スコボ？」

さう聞きかへしながら、ぶるぶると冷たい水で顔をあらつた。研吉には、スコといはれたときから、それがスコツプであることはわかつてゐた。そんなくだらない

反撥をわれながら大人氣ないと気づいて、どういへば通じるかともぢもぢしてゐる花石に、

「ああ、スコツプですね」

と初めて気づいたやうにいつた。

「へえ、そのスコツプです。ござつせうか」

「たしか、納屋のなかにあつたと思ひますがね」

花石はありがたうございますといつて、くらい納屋の戸をがたがたいはせて入つた。中でしきりにものをひつくりかへす音がしてゐたが、しばらくしてから、柄首のはづれかけた一振のスコツプを持つて出て來た。また、竹戸から表の方へ出ていつた。くらい表の方で、あつたかな、ありや、柄がとれかかつとるな、ま、これでもええわい、といつてゐる父啓作の聲だけが聞えた。

研吉が花石につまらない意地悪をいつたのは、別段、植木屋に對してではなくて、父に對してであつたかも知れない。また、父に對してでもなく、いらいらしてゐる

研吉自身への反撥であつたかも知れない。表の方で、さくさくと泥をすくふ音とほとんど同時のやうに、ずしんとなにか重量のあるものが地に落ちた音がした。

木がたふれたかと思はれたが、さうではないらしく、すぐに滑車を巻く音にまじつて、よいさよいさと、四五人の聲が合はさつて聞えた。なのみ、の木を起してゐるのであらう。

「大將、坐つたら見事ですぞ。これくらゐのものは、この附近にはありませんぞ」花石が荒い息づかひのなかから、勢ひこんでいふのが聞えた。啓作の聲はしなかつたが、満足さうにうなづきながら、泥鯨髭をひねつてゐる父の顔が眼に見えるやうであつた。

もともと、玄關わきになのみ、の木を植ゑようと父がいつてゐたのは半年も前からである。市外に近い場所にある山で、或るとき、啓作は炭焼きの講習に行つた折に見つけた木がひどく気に入つて、さつそく立木のまま、買つた。それをいつか庭に植ゑてもらはうと、口ぐせのやうにいつてゐたが、なにかと長びいてゐた。啓作が

食事の折などに、その木のみごとさを、大きさを手で輪をつくつてみせたり、葉の茂り具合を、手つきでしてみせたりして、いかにもたのしげに語るのを、もうあきるほど、たびたび、母のおちかも、研吉夫婦も、孫の研太もきいてゐた。孫の研太は、その木には蟬がとまるかと聞き、油蟬でもみんな蟬でもわしわしでもなんでもとまると、啓作が答へると、研太は、もう、夏の終らぬうちに運んで来てくれと祖父にせがんだ。おちかは、父さんのもの好きには仕方がないといひ、研吉は、その立派な木が、いままでは、一本の百日紅のほか、ほとんど木らしい木のない庭に植ゑるのは、わるいことではないと考へてゐた。庭には、なんでも屋といはれる父が、自分で石を集め、セメントをこねて作つた瓢箪池があるが、築山自身には、貧弱な雑木があるきり、見られるやうな木はなかつた。一本の百日紅はまた父が自慢だ。あつて、なめらかな木肌を持つた幹が、高く、ひろく、ゆたかに枝を張り、夏の間中、まつ赤な花を咲かせてゐた。

数日前の夕方、植木屋の花石が、大將はおいででせうかと、裏口から入つて来た。

啓作は町内會長をしてゐるので、そのとき、近くの寺で、常會があり、不在であつた。花石はそんなら、若大將にお話しときますで、歸られたら、御相談なさつておいて下さい、といつて、——さきごろ買ひとつたなみの木を、運びだす相談を父から受けたので、豫算を組んでみた。根が張つてゐるし、高さは二十尺ちかくもあるし、牛車を雇つても、どうしても二臺はいると思はれる。あるひは三臺かかるかも知れない。牛車は一臺に百貫目つまれるから、二臺なら二百貫目積まれるといふやうなわけにはいかない、連結をして、一つのを載せるとすると、力が弱るものだ。そこで、自分はひんずな費用をかけずにやらうと思ふから、なんとかして二臺で曳くつもりでゐる。この節、牛車一臺はどうしても十五圓出さんと来てくれな。二臺なら三十圓、三臺なら、四十五圓。それをまる二日と見て、九十圓。ひよつとしたら、三日かかるかも知れない。それから植ゑ込みの人夫賃だが、わしはつねづねいさになつてゐるので、わたしは儲けなくてもよいが、雇人夫はさうはいかない。この節では、四圓から四圓五十錢出さないと雇へない。それに、……とい

ふ風なことを、もちまへのくどくどしい話ふりで話し、研吉から父への傳言をたのんだ。つまり、そのなみの木は掘り起してから、庭に植ゑこみを終るまでに、だいたい、二百圓はみておいて貰はなくはなるまいといふのである。研吉はいささか意外の感にうたれた。木を持つて来て植ゑるだけなのに、そんなに費用がかかるとは知らなかつたし、知らなかつたために、啓作がときどきその木のことを得意さうに話すときには、早く持つて来たらどうですかなどと合槌を打つてゐたこともあつたのだ。費用の大きいのおどろいてゐると、花石は、それで、これは大將も申されて居られたですが、入り前の半分は若大將が出して下さるとのことでありましたから、とつけ加へた。

研吉は入費の半分といふことはなにも聞いてゐなかつたし、また、それはどうでもよかつた。しかし、彼は、そのとき、今夜あたりも、父が町内會で話してゐるにちがひないことを思ひ浮べて苦笑がわいた。戦時下において、いよいよ時局が逼迫し、國民がこぞつて質實剛健な生活をしなくてはならぬ時が來てゐる。殊に、日米

問題が緊迫をつけてゐるときに、國民は一人のこらず、「むだな冗費」を節し、水をのんでも國に協力する覺悟が必要である。さういふことは、日頃からの父の持説であるし、今夜も町内會で、繰りかへしてゐるにちがひない。そのことは、また、なにも父だけの説でなく、現在の國民のすべての氣持でなくてはなるまい。研吉も歸還兵として十分、そのことを反省し、つとめてゐるつもりである。その父が、植木を庭に運ぶために二百圓もの金を費すといふことは、研吉は腑に落ちかねた。それは一種の反撥となつて、研吉の心を苛だたせた。研吉は新聞社に出てゐるので、時局に關するいろいろの記事を書かなくてはならぬ。職業であるから、心にもない、どんな時局迎合的な記事書いてもよいかも知れないが、研吉にはどうも、平氣でそれをやる同僚の眞似ができない。かへりみて自分の生活自身にやましいところがあれば、たとへ新聞記事とはいつても、思ふやうに筆がとれないのだ。損な氣質なのであらう。彼は、戰友たちへの慰問袋や、國防獻金や、その他のことも、やらなくてはならぬと始終氣にかかりながら、収入が思ふにまかせぬまま、ままたらずに

ゐた。

ある日、新聞社の勤めから歸つて來てみると、坂の下から、牛の鳴く聲が聞えた。家にたどりつくと、家の前に、ものうさうに赤い牛がつかれてゐた。牛車が二臺連結され、そのうへに、道幅いつばいになるほど大きいなみの木が、葉で根をまかれて、横に積まれてあつた。臺所でにぎやかな笑ひ聲がするので、行つてみると、父が土間に坐りこみ、楯に腰を下した花石と酒をのんでゐた。啓作はこのごろはのままないので、しきりに、花石にすすめてゐたが、花石はもう眞赤になつて、上下の唇をのべつに舌でなめながら、べこと研吉に頭を下げた。

「見たか」

筒袖姿の啓作は泥鯨髭を不自由な方の右手でしごきながら、得意さうにいつた。なみの木の現物を見たかといふ意味であらう。

「立派なものでつぞ。あげなのは、ちよつとありまへんど。そんなかはり、出すのに、いたしう、骨折りました」

花石は、充血した、細い目をひつぱりあけるやうにして、

「よばれとります。どうも、いやしうて、どうもなりません。酒をみつけたら、歸にきりまつせんで、……どうです、いつばい……」

花石はもう五十を越してゐるであらう。粗末な法被はっぴを着て、赤土のついた地下足袋をはいた右足を折つて土間にあげ、尻半分で腰かけてゐた。この男は、つねづね、自分は名前のおかげで植木屋になつたのだといつてゐる。そんなこともあるまいが、さういへば、花と石であるから、誰かが、お前の名は商賣にはもつて來いだなといつたのを、そんな風に自分で煽きなほしてたのしんでゐる風に見える。腕はたしかだと啓作はつねに花石の伎倆を稱揚してゐる。自分でも、この道ではひとに負けぬとうぬぼれてゐて、ほかのことでは人とあらずふことはないが、庭のことになると、持ち前のぢやら聲を張りたてて、誰にもゆづらなかつた。名人氣質の職人にあり勝な、金持が金はいくらでも出すからといふやうな仕事にはゆかず、仕事をして居つても、金を笠に着て無法なことをいふところからは、さつさと引きあげて

來るといふやうな話もいくつか持つてゐた。そんな男であつたから、狷介な啓作とも氣が合つてゐたのかも知れない。四ヶ月ほど前、ひとりの軍服を着た若い男をつれて來たことがある。それは女房の弟とかで、召集をうけたので挨拶に來たといふ。來たときにはどちらもひどく酔つてゐて、啓作がめでたいからといつて、菰かぶりからちか、五合樽に酒をくみとつて來たが、口をつけただけでこぼしてしまつた。なにもわからないでゐるのかと思つてゐると、義弟が、大將、いろいろお世話になりました、元氣でつとめてかへります、と、いふと、どろんと眠さうに眼をとちかけてゐた花石は、なにや、と、突然くわつと充血した眼をあけて、軍服の男をなぐりたふした。つづけさまになぐつた。啓作がとめると、離して下さい、こんげな奴はたたきころしてやる、卑怯もんが、つとめてかへるとはなんちゆういひごとか、死ね、かへんな、死ね、死ね、と、またなぐりかかつた。花石が、いつげいといつて、半分ほど入つてゐる五合樽をさしだしたときに、研吉はふつと、そのときのとが頭に浮んだ。

運んで来たをのみの木は、みごとな大木であつたために、簡單には植わらなかつた。まづ、持つて来る途中、重量のために、栄養不良の牛が、二頭がかりでもなかなかに引けず、なん度も、バスをとめたといふ。それから、持つて来てみると、電話線が邪魔になつて、入れることができないのである。たいてい入るといふつもりであつたのが、やつぱり眼見當のちがひであつた。そこで電話線を若干移動して貰ふことを郵便局にたのむと、所要の手續をして貰はねば困る、その書類が出たら、所管逓信局に廻して許可を仰ぐといふ。いづれにしろ、四五日はかからうといふ。仕方がないので、そのままにしておく、所轄の交番所から、交通妨害になるから早くかたづけて貰ひたいといつて来た。あまりやかましくいはれるので、花石は前にもあつかつたことがあるのか、手際よく電話線の位置を變へて、ともかくも、その木を庭に入れた。すると、今度は郵便局から、なぜ無断で電話線を動かしたかと、叱言を食つた。これを平あやまりにあやまつた。

花石がスコップを借りに来たときに、顔を洗ひながら、研吉は、なにか心にひつ

かかるものがあつて、つまらない意地悪をいつた。しかし、彼は、そんなら、最初から何故自分はそのみの木を持つて来て植ゑることに反対しなかつたか。町のひとひととが、時局のなりゆきに心をひそめて静かにしてゐることを考へると、研吉はこの數日は、勤めに出るときにも、かへるときにも、人から顔を見られるのははばかられる思ひさへしてゐた。少くない費用をつかひ、大騒動をして、途方もない大木を庭に植ゑてゐる自分の家のことを考へると、研吉は困惑の氣持をおさへることができない。殊に、新聞記者である研吉には、最近、めつきり増えた國防獻金の實態がよく耳に入る。また、新聞記者として、そんな話は記事にするために出かけてゆく。會つてみると、食べるものも食べないやうにしてためた零細の金を、國のためといつて差しだしてゐる人が多い。また、最近では、飛行機獻納のためといつて、全國を行脚してゐる兵隊婆さんといはれる人がこの地方に来た。北海道から、臺灣をはじめ、その婆さんはもう六十八といふのに、自分の脚で歩き、十錢五十錢一圓といふ金を集め、もう二萬圓の上を集めてゐた。研吉はその婆さんに會ひ、話をき

きながら、終始、頭のなかに、一本の木のみの木がひつかかつてゐた。

研吉は顔を洗ひ終ると、肌ぬぎになつて、冷水摩擦をした。兵隊にゐたときよりはすこし肥えたと思ひながら、力を入れてごしごしと冷たい水で肌をこすつた。

「父さん、まだ、井戸端？」

見えない家のなかから、妻の美繪の聲がした。

「うん、なにか」

「ラジオ聞きなさいよ。戦争が始まつたわよ」

ラジオがすこし前から鳴りはじめてゐたのは研吉も気づいてゐた。研吉はいそいで着物を着ながら、家のなかに入つた。母が、いま起きたばかりと思はれる服れぼつたい顔の研太を膝のうへにちよこんとのせて、ひつそりとして、ラジオの前に坐つてゐた。ラジオは途中らしかつたが、同じ言葉を何度も繰り返してゐた。

「帝國陸海軍は本八日未明、西南太平洋において、米英軍と戦闘状態に入れり。

——このやうに、ただいま、大本營陸海軍部より發表されました。……もう一度く

りかへして申しあげます。帝國陸海軍は……」

アナウンサーの聲も興奮してゐることが観取された。ずっと、身體の中を靈氣のやうなものが通つた。長びいてゐた日米會談が決裂したのである。日本は米英とすでに戦闘を始めた。研吉の頭に、多くの島嶼の點在してゐる縹渺たる西太平洋の地圖がひらめいた。そのうへを踏みしめてゆく兵隊の姿が浮んだ。身内に興奮に似たものがぬくぬくとわきはじめた。しかし、それはおどろきの感情とはまつたく違つてゐた。自分の勇氣の所在をうしなふまいと反省しつつ、國の運命のなかへ溶けこまうとするやうな快感であつた。祖國といふ言葉を、いまこそ、どんな大きな聲でも叫ぶことができるといふ安心である。研吉は自分の落ちつきを、これは自分ひとりではなく、國民全部の落ちつきでもあらうと、はつきりと信じてゐることができた。

ラジオは「敵は幾萬ありとても」といふ「元寇の歌」を勢ひよく奏しはじめた。美繪が知らせたとみえて、啓作がやつて來たが、

「やつたか。やるがええ。はじめからでけん相談しとつたんぢやから、かうなることは最初からわかつとつたんぢや」

さういひながら、どたどたと縁側の方に出てゆき、

「あ、花石さん、な、みの根に巻いとつた薬と繩とは棄てんで、とつといておくれや」

と、庭の方に叫んだ。

「へえい」

まのぬけた花石の返事が聞えた。

和哇、ウエーク島、ヒリツピン、ダバオ、シンガポール、馬來半島、その他、廣大な地域にわたる戦果のニュースがつぎつぎに入つて來るところになると、すつかり内も明けた。な、みの木は滑車で巻きあげられ、かたく根には土がかけられた。牛車の上へに横になつてゐたときよりは、植わつてみると、見あげるばかりであつた。四つの幹にわかれた木は半分から上に丸味のある葉むらをゆたかにまとひつけ、ど

つしりと坐つた。

朝食が始まると、啓作は開戦のお祝ひぢやといつて、菰かぶりから、得意の五合俵に酒をみたして來た。花石も、雇つた三人の男たちも、妙にひきしまつた顔をして、冷酒をのんだ。啓作は神棚に燈明をともし、拍手をうつた。

めづらしく、啓作も、湯呑み茶碗にいつばい酒をみたし、ぐつとひと息にのた。啓作老人はもとほ相當な酒豪だつたのであるが、數年前から禁酒をしてゐた。蠟燭のちらつく神棚の下には、「一には財を失ふ。二には病を生ず。三には闘ひ争ふ。四には悪名流布す。五には恚怒暴かに生ず。六には智慧日に損ず。」といふ禁酒の辨を書いた日本紙がぶら下つてゐる。

「研太、御飯粒をこぼすな。もつたいないことをするな。こぼれたのはひろつて食べなさい」と孫をたしなめてから、

「おちか、飯がすんだら、組長さんとこを廻つて來てくれ。今夜、緊急臨時常會をひらく。それから、研吉は社へ出る前に、水道口からホースをつないで、池に水を

入れるやうにしといてくれ。たまるのはわしが見とるから、栓だけひねつといてくれりやええ。かうなりや、いつ空襲があるか知れんから、池をいつもいつばいにしとかにやいかん」

新聞社へ出る支度をしてから、研吉は、父にいはれたとほり、長いゴムのホースを、臺所の水道口から、池までひつばつた。十間くらゐもあつて、座敷を三間もホースを這はせた。栓をひねると、水のゆくにつれて、ホースが生きてゐるやうに動き、とまると、池の方に水が落ちはじめた。

「父ちゃん、ほんとに敵の飛行機が来るの？」

研太は池に水の落ちるのをながめながら、真剣な顔できいた。

「ああ、来るかも知れんな」

さう答へながら、水の落ちてゐる瓢箪池を、研吉はなんとなくぼんやりと見てゐた。池の水はいまは二寸くらゐしかなく、いつばいになれば、二尺は十分にたまるであらう。まんなかには、洞になつた石がひとつおいてあつて、その下に一尺ふか

さくらゐの壺が埋けてある。三十四ほど入れてある鯉や鮒や金魚は、その壺に入つてじつとしてゐたが、水が落ちはじめると、その穴を出て来た。先頭に一匹の緋鯉が立ち、そのあとから引きつづくやうに、鮒や金魚が、おほむね三列側面縦隊に隊伍を組んで泳いでいつた。魚の列は先頭の鯉の誘導するままに、三度ほど、池を巡回すると、水の落ちてゐるところに来て群がった。研吉がなにか、しんとなつた氣持でゐると、水の落ちてゐる箇所から、すこしはなれたところに、ほとりと赤い花がひとひら落ちた。赤い中心から、白い波紋がひろがった。氣がつくと、池のうへまで枝を出して、寒椿が眼もいたいほどの眞紅な花びらを、十ひらほどつけてゐた。な、みの木を植ゑる地ひびきで、そのひとひらが落ちたものであらう。空はにぶく置んでゐて、赤味を帯びた太陽の光線が、ものやはらかにさしかけて来てゐた。小鳥がしきりに囀る聲がするのでふりかへると、植ゑたばかりのな、みの木に、雀がたぐさん来てとまつてゐた。あまり遠くない停車場から汽笛の音とともに、列車を連結する、金屬的な音が、いつもよりちかく、聞えた。

「若い大將、お早よございます」

ふいに聲をかけられて、なにかはつとして、研吉は竹戸の方を見た。腰をひくくかがめながら、裏の長屋にゐる朝鮮人の鄭が、遠慮勝の様子で、入つて来た。蒜すきで、そんなに離れてゐるのに、もう蒜くさい。

「なんだね」

「へえ、實は、すつぽんを頂きに來ましたんで、……いま、大將に歸つて置きました」

「すつぽん？」

「はあ、この間、すつぽんを池に入れて貰つてありました。わたしとこ、池ないですから、大將にたのみました。池入れました。家内が病氣で、すつぽんの血がいきますから、貰つてゆきます」

「さうかね。なんにも知らなかつたが、……そんなら取つてかへんなさい」

鄭は竹竿をもつて入つて來て、池のなかを探しはじめた。なかなか見つからない

らしく、首をひねりながら、岩の間をのぞきこんだり、竹で穴のなかをつついてみたりした。隊伍を組んでゐた金魚の群が列をみだした。

玄關で美繪は靴をみがいてゐた。ラジオはつぎつぎに戦争のニュースを知らせてゐた。臺所で花石と父とはまだ酒をのんでゐた。すぐ酔ふ花石が、なにかくどくどといつてゐる。研吉は框に腰を下して靴をはきながら、

「植木屋はなにをいつてるのだね」

「さあ、なんですか。なのみがあんまり重かつたんで、牛車ウシクルマのボロツコが折れたので、十圓ばかり別に氣ばつてくれんでせうかとかな〜とか、いつてるやうよ」

「ふうん」

「今日はおそいの？」

「どうして」

「だつて、戦争が始まつたでせう」

「さうかも知れないね」

「父ちゃん、また、戦争いくの？」

研太がいつた。

「うん、行くよ」

研吉は研太の頭に手をおいて、亂暴にふりまはしてから家を出た。町は別だん變つた様子もなかつた。

坂の下で、下から自轉車を押しながら上つて來る大工の由造に會つた。由造はやはり裏長屋にゐる男で啓作が今の家を建てるときには、建具の方の加勢をした男である。研吉を見ると、由造は、にこにここと、若いくせに皺だらけの顔を寄せて來て、

「御出勤ですか」

「いまだ」

「實は、お宅の大切なものを、昨日から拜借してゐました。おかへしにあがるところで。實は、昨夜から岩屋に魚つりに行つとりました。遠いんで、お宅の自轉車をお借りして行つたんです。……若大將、お晝は、どちらで？」

「どちらといふと」

「社の方ですか。お晝にはかへられますか」

「いや、晝はたいてい社だ」

「さうですか。それは困つたな。しかし、……どうですか。この魚をすこし下げて行きなさらんか。晝がしこたま釣れましてな。いま、自轉車をお借りしたお禮に、さしあげようと存じまして、ほれ、こんなを持つて來たんですが、……若大將にもあがつていただきたいんで、どうです、社に持つていかれたら。焼いて食べて下さい。焼くとまた格別うまいですよ。同僚の方も居られるでせう。まだ、生きとりますよ。さうしませう」

ひとりで喋りながら、由造は、すばやく自轉車のうしろにつけてゐた籠のなかから、十四ほどの鯊を別の包みにして、紐でくくり、ぶら下げるやうにしてくれた。荷づくりをしてゐるのを見ながら、研吉は、

「由さんは、日本がアメリカ、イギリスと戦端をひらいたのを知つてゐるかね」

ときいた。

「へえ、知つとります。岩屋で聞きました。やるがよござす。待つとりました。わつしも兵隊ですから、今度こそは行けると思ふとります。——さ、これで、よござつしう。あんまり、ぶらぶら振らんやうにして下さい。抜けて落ちるかも知れん」

由造は研吉に魚をわたすと、また、自轉車を押して坂をのぼつていつた。ふりかへると、やはらかい日ざしのなかに、屋根のうへたかく、なみの木がそびえてゐた。一本のこの木が、とつぜん、このあたりの風景をすっかり變へてしまつたやうに、ふと、そんな風にみえた。研吉は、ぶらんぶらんと鯨をぶらさげ、軽い足どりで坂を下つていつた。

李 花

花はうつくしい。それはだれでも知つてゐる。そこで花を愛する。花が咲く。たそがれの薄霧のなかに、光るやうに白く咲く。風にもろい花ほど美しい。李の花は風にもろい。李の花は美しい。

山のなかに、なにか、おそろしいものが棲んでゐるといはれる淵があつた。その淵のそばを、みんなは避けて通る。夜はたれも通らない。かんかんとなにかもあきらかに陽が照るときだけ、ひとびとはその淵のよこの、雑草のしげつた道を通る。そのときでも、なるだけ、山の端に寄つた方を通り、淵に影をうつさないやうに注

意をする。道がせまいので、それはなかなかむつかしい。しかし、その淵のみちはそんなに長くはないし、駈けぬければ、たいてい危険はない。その淵にゐる魔のものといふのが、頭のはたらきが敏活でなく、間が抜けてゐるものにちがひないといふことは、そのやうに駈けぬければ、たとへあやまつて淵に影を落しても、つかまつたことがないことでわかる。通りすぎたあとで、水のなかからなにか浮きあがる水音がし、奇妙な聲がするのだが、それは振りかへつてみたものがないので、その魔のものの正體はたれも知らない。

淵に主がゐるといふことは傳説であるが、そのやうな淵になにもゐなくては、その青々とよどんだ意味ありげな水の色にも、のびるままに生ひしげつた水邊の葦の葉むらにも、しづかな晝、そのとまつた重味で葦の葉のさきを水にひたし、そこから小さな波紋を淵いつばいにひろげさせてゆく頭の赤いおはぐろとんぼにも、するどく鳴いて飛ぶよしきりにも、水のうへに浮いてかたまつた朽葉にも、——つまり、そのやうに古色蒼然とした淵全體に、なんの美しさも、莊嚴さもないのである。な

にかゝるといふことによつて、淵はいよいよ美しく、その價値をたかめる。

河童たちはこの淵の魔ものをおそれた。河童たちはこのやうな立派な淵がありながら、それに棲まなかつた。傳説を尊敬したのである。その淵からすこし離れたたわいもない汚い池に、河童たちはむらがり棲んだ。河童たちの棲んでゐる池は、その淵の五分の一もない。馬の足あとに水のたまつたのにさへ、三千匹は棲息するところができるゆゑ、その池がけつして狭くて不自由といふわけではなかつたが、河童たちは、その淵の水の色をうらやんだ。その淵のすみ心地のよさは、水の色を見ればすぐわかる。しかし、河童は傳説の掟をつねにまもる。その淵になにか主が、すでに棲んでゐて、その傳説によつて、その淵が高名であるときに、それを攪亂することは、仁義にもとる。また、その淵の主として、河童たちのゐる池に對してはなんらの意志表示をしないのだ。しかし、ほんたうは、河童たちは、その淵をおそれたのである。

あるとき、池にゐるいつびきの河童が道をうしなつて、その淵のほとりに出たこ

とがある。うつくしい月にさそはれて、空をとびまはり、うかうかとあそんでゐるうちに疲れたので、地に降りた。そして、ふと氣づくとき、日ごろ敬遠してゐた淵が目のまへにあつた。しづかによんだ黒い淵のまんなかに十六夜の月がはつきりとうつつてゐた。はつとした刹那、自分のすぐ足もとから、くろい小さなものが淵のなかにとびこんだ。ぼちやんと音がして、水面から消えた。その水音は、あたりの森にこだました。ところが、その飛びこんだものは、相當のいきほひで水を破つたにもかかはらず、淵の面にうつつた月のかたちは、まったくくづれず、それは月のかげではなく、月自身がそこにあるやうに、動かなかつた。池の河童はおどろきとおそれとに、からだかふるへ、背の甲羅がしばらくの間がちと鳴りやまなかつた。足も自由にうごかず、やつと池にかへりつくことができた。それ以來、池にゐる河童たちに、ふかく淵をおそれるところが兆した。

池の河童たちは、こよなく花を愛した。白い花がうつくしく、また風にもろい花

ほどうつくしいことは、はじめに書いたとほりである。李の花がうすみどりのさやにつつまれたつぼみをひとつづつやぶつて、いちめん星をちりばめたやうに咲くと、それは遠くからでもまぶしいくらゐに見える。またそのたとへやうもないふくよかな香りは、風にのせられて、はるか野のはてにまでひろがる。

花の好きな池の河童たちは、李の花のさきみだれるころになると、どうしても、よごれた赤どろの池の底にじつとしてゐることができなかつた。河童たちは、つきつきに池をすてて、花のほとりに出た。思ひ思ひに、ひとりづつ、あるひは、二三四つづつれだちながら、李の花のところへ行つた。

しかしながら、ここに、ひとつ困つたことがあつた。それは、その李の木のあるところが、魔のゐる淵から、あまりはなれてゐなかつたのだ。そのうへ、李の花のいちばんきれいに咲いてゐるところの見えるのは、もつとも淵に近い場所であつた。そのやうな意地のわるい配置にもかかはらず、河童たちは、なほも花を見に行つた。淵をおそれるところもさることながら、その花のうつくしさは淵への恐怖さへ征服

したのである。また、飛翔することのできる池の河童たちは、その淵をおそれるところは深いとはいへ、淵に影をおとすことなしに、迂廻して、李の花のところへ行ることができるのである。河童たちは、こころゆくまで花のうつくしさに酔ふことができた。きらめき光るやうな白い李の花のまはりに群れ、その香に酔ひ、うたをうたひ、たはむれた。あまり遠くないところに、鏡のやうに、動かず、淵はしづまりかへつてゐた。毎日のごとく、池の河童たちは、李の花のまはりをさまよひ暮した。

白い李の花が、その最大のうつくしさを發揮するときが来た。風にもろい花ほどうつくしい。ある日、西の空のなかから吹きおこつて来た風が、李の花を散らしはじめた。ふきおとされる星くづのやうに、あるひは、大東の雪のやうに、ぱつと散りたつた李の花は、はらはらと舞ひながら、吹きあがり、吹きながれていつた。その落花のさまのうつくしさに、河童たちは、どつと歡聲をあげた。花びらは風のまにまにながれ、あまり遠くない淵の方へ、散つていつた。花びらは、淵の水面には

らはらと落ち、まつ青な水面に描かれた模様のやうにあざやかに浮いた。みるみる青い淵の面が、花びらで埋められていつたのである。

すると、それまでは静まりかへつてゐた水面が、にはかにざはめきはじめたと思ふと、水面から無数にあたまをもたげたものがあつた。さうして、それらの動物たちは、水面にうかんだ李の花びらをたなごころにすくひ、奇妙なよろこびの聲を發し、どよめきさわいだ。はじめ、李花のほとりにゐた池の河童たちは、花びらが淵の水面に散りおちてゆくときから、ふたたび淵へのおそれのところが、しだいに胸にわきはじめてゐた。花にみとれて忘れてゐた心におもひいたり、にはかに地に降りたつと、土堤のかけに身をひそめて、恐怖のまなざしをもつて、淵の方を凝視した。しかし、その恐怖のころの底にも、この花に對して、日ごろ、自分たちが尊敬してゐる淵の魔ものが、いかなるふるまひをするであらうかといふ期待は持つてゐたのである。すると、かつて、一度も見たこともなかつた淵の魔ものが、水面をさわがして姿をあらはした。さうして、その淵の魔ものも、また、花を愛する心に

おいては、すこしもかはりのなかつたことがわかつた。

このやうにして、池の河童たちと淵の河童たちとの交遊がはじまつた。故もなく、おそれてゐたことが、いまは笑ひばなしとなつた。それはおたがひがすこぶるはにかみやであつたからであらう。淵の魔ものが同じ河童であつたとわかると、それからは、池の河童たちは、われさきに、水のうつくしい淵にあそびにいつた。また淵の河童たちも、池にやつてきた。さうして、よく今までこんな汚い池にゐたものだといつて、皮肉な態度ではなく、その謙虚さと忍耐づよさを稱揚した。まへに月の夜、淵の河童が、水にうつつた月かけを破らずに淵に沈んだことに非常におどろいたことをはなすと、淵の河童は、それは、月のある空からなにかが急に降りて來たので、自分の方がびつくりしたのだと答へ、自由に空をとぶことのできるのを、非常に羨んだ。さうしておのおのの技術をほこらず、兩方の河童たちは仲よくした。しかしながら、この交遊が、また、奇妙な倦怠から、いくらか疎遠になることもあ

つた。それは倦怠ではなかつたかも知れない。池の河童たちは奇妙なもの足りなさにとらはれた。それは、自分たちがおそれてゐた淵の正體がわかつたために、傳説の莊嚴さを失つたからである。それは、たかが、自分たちと同じ河童であつた。その淵の魔ものがなにかわからぬときに、その傳説を胸のなかいっぱいに持つてゐた。そのときの、緊迫したところがどこかへ行つてしまつた索然たる感懷は、どうにもやりきれぬものであつた。傳説の眞實が實驗でないことは明らかである。池の河童たちが、もう淵のそばをおそれて通る必要がなくなつたことが、よろこぶべきことであることは、たれも考へないのである。さうして、池の河童たちは、やがて、このやうな結果をもたらす役目を果した李の花びらをも、もう、うつくしいとはたれもいはなくなつたのである。

珊瑚礁

むかし、勤勉な河童があつて南に行つた。太陽はあかるくまぶしくきらきらとうすもやのかかつてゐる南方の空氣のなかにみなぎりあふれ、光りのいとが無数の金粉のやうにもつれて、おほらかな潮のかをりのなかにしみこんでゐるやうな場所では、どこか深い海のそこでいくつもの海洋からながれこんで來る海流がふれあつて立てる音がおどろおどろしくひびくのである。あつさにも馴れて來ると絢爛たる南の花々のうつくしさが眼に映りはじめた。すべて大づくりなゆるやかさをもつて、地面にまでその重たい花びらをたらしめてゐる。早口でいへば舌を噛むやうなめづらしい植物の名前をおぼえるのに、勤勉ではあるが暗愚な河童はひと苦勞した。さう

してあまりにきびしさのない水のあたたかさですこし心がゆるんで来たことを自分でも気づいたときには、蓄積の想念にたいするかすかな疑念がわきはじめてゐたのである。

南方へ移住して来たのは河童だけではなかつた。花々の誘惑をうけて多くの蜂のむれが蜜をあつめるためにやつて来た。おびただしい花々のなかに豊富な蜜があつた。蜂はよろこんだ。精勵なる作業がはじまつた。河童はきらめく光りのなかをまひあがる花粉のごとく多くの蜂たちが蜜を蒐集してゐるすがたを晝となく夜となく見た。河童は自分の棲みかをさだめるために縹渺とした果てからまつ青な水をうちよせて来る海濱に出て、珊瑚礁のあひだに沈んだ。眞紅の枝をはりめぐらしてゐる珊瑚の林を縫うて、黄いろい縞のある平べつたい魚や、口ばかり大きくて尻尾のない長い魚や、顔ぢゆう眼ばかりのやうな丸い魚などがしきりなしに遊弋し、闘志をもつたとげのするどい魚類がときをり珊瑚の森林のなかではげしくたたかつた。勤勉な河童は魚の骨をたくはへはじめた。

どこかのあたたかい海の底にも寒流が通つてゐるところもあるといふ。その音がきこえるともいふ。耳をすましてその音を聞かうとしてゐるときに、ある日、河童はふしぎな羽音をきいた。それは聞きなれぬ音ではなく、かれが海底に来るまへに花々のさきみだれてゐるあかるい高原で晝と夜となく聞いた音であつた。蜂が海へ来たのであらうか。蜂が海へ来たのであらうか。あたかも潮がひいてゐた。青い水面におほくの珊瑚が眞紅のうつくしい花のやうにひらき、それにふりかかる花粉のやうに蜂のむれがゆるやかなしあきらかに焦燥にかられた羽音をたてて降りて来るのであつた。珊瑚の枝に蜂のむれはとまつた。日が暮れはじめ、暮れた。潮が満ちて来て珊瑚礁は海底にしづんだ。蜂もともにしづんだ。

毎日おなじことがくりかへされるにいたつて、河童はこの悽壯な勇氣に慄然としはじめた。かれはおどろいたときにする癖の背の甲羅を鳴らした。蓄積の想念に生じた疑念の小ささが、おもひがけぬあたらしい勇氣に還元されてゆくのを意識しつつ、海面に浮く蜂の屍をながめた。南方には花が多すぎたのだ。花のいのちのうつ

くしさは咲くときすでに散ることの運命をふくんでゐるからにちがひない。散るときを惜んで咲いてゐるあひだをいつくしむ心にいきてゆくいのちのうつくしさもやどされるものであらう。蜂たちは散るときをおそれ、花のなくなる季節のために、花のあるあひだに精勵の作業をつづけた。花のなくなる季節がないといふことはなんといふたよりないことであらう。蜂は信念をうしなつた。つねに花があり、つねに蜜があるものをなんのために蓄積をする必要があらう。蜂は花の美しさにうたがひが生じ、生きることの倦怠のところが湧いた。河童が海にしづんだのはこのときである。

しかし蜂たちはあたらしい花園を発見した。青い波のうへに眞紅の花々が壯麗にさきいでてゐることを知つたときに蜂たちはすべてをわすれた。花粉のごとく蜂たちは珊瑚礁にむらがり降り満潮とともにその生を終つた。

太陽はあかるくまぶしくきらきらとうすもやのかかつてゐる南方の空氣のなかにみなぎりあふれ、光りのいとが無数の花粉のやうにもつれておほらかな潮のかをり

のなかにしみこんでゐるやうな場所をながれてゆく蜂たちのすがたを、珊瑚礁の底に端坐した河童は感歎するまなざしをもつて眺めずには居られない。かれのところにふたたび海底をいでようといふ意志がうごいて來たときに、潮がひきはじめ壯麗な珊瑚の花々が水面にうかびはじめ、天の一角から蜂たちのゆるやかな羽音がおこつて來るのである。

清流

水藻のあひだにゆらめきただよふ緑くづのやうなみぢんこのすがたさへもはつきりと見わけられるこの川底では、晝間の時折りはまぶしくて兩眼とも開けてゐられないことがある。河童たちは水底のやはらかい砂地によこたはつて片眼をとぢ、きらきらと水を透して屈折しながらさしこんで来る陽の光のなかに、またも生れたばかりの車蝦が群をなして弾ねてゐるのにほくそ笑む。この直角の運動をする蝦たちが次から次に無數に生まれながら、このあまりひろくない流れのなかにいつばいに満たされることの決してないのは、かれらがすべて河童たちの唯一の食餌となるからである。蝦のからだはほとんど透明に近く、からだを通して水面にゆらぐ波紋も

見わけられるほどであつて、このやうな清潔な食物がほかにあらうとは考へられな
い。しかし、この美しい餌が時にはうすぐろい髭だらけのみぢんこと區別すること
が出来ないやうにきたなく見えることがある。それは太陽の光がささず天には黒雲
が蔽ひかぶさり、はげしい風が吹き、すさまじい雨が落ちてゐるやうな天候の時
である。潔癖な河童たちはそのやうな時には眼の前に遊弋してゐる蝦が晴天の日には
美しく透明に見えるからだを持つた蝦とまったく同じものであつて、黒く見えるの
は單に天候のせみにすぎないとわかつてゐても、その薄ぐろく見える蝦を食べない、
どんなに空腹の時でもさうなのである。

いつたいこの邊は雨風がつよく暴の多い地方であつた。海拔六千尺の天拜山から
源を發してゐる白魚川はそのやうな時にはしばしば河岸を越えて氾濫をする。いく
つかある瀧は溢れたつ水量をうけかねてすさまじい飛沫を散らし、岩をたたき、つ
んざくやうな物音を立てて進む。しかしこのやうなときでも河童たちのゐる川底は
割合に静かであつた。川面は雨にたたかれ風になぶられて亂れるけれども、水底で

はただ暗く流れが少しばかり早くなるにすぎなかつた。河童たちは砂地に寝そべつて暴のすぎるのを待つ。暴が過ぎる。すると暴の間にも暗澹たる水底で蝦といふものは間斷ない繁殖をつづけてゐるのか、明るい日ざしがさしはじめた水中には、意外にも多くの蝦の群が直角の運動をしながら遊弋してゐるのである。しかしながら、このやうな川底を見棄てて多くの河童たちが遠くの地方へさまよひ出た。白魚川の清流に残つた河童たちは常に去つて行つた友だちのことを忘れることが出来な。遠國の友だちのことは風のたよりによつてかれらの耳に入る。河童たちが水底を見棄てて飛翔をこととするやうになつたためにさまざまの悲劇が起つた。千軒岳では噴火口の上を飛びまはつてゐた多くの河童たちが火山の爆發とともに熔岩の中にまきこまれて生命を終つたといふことである。また高塔山では河童同志ではしたくない争ひをはじめ、人間の山伏の法力に敗れて多くの河童たちは青いどろどろの液体となつて溶けながれ、また多くの河童たちは一本の釘によつて永遠に地中に封じこめられたといふことである。また或るものは飛翔中放屁をしたために天帝の怒り

に觸れて一本の椎の樹の中に閉ぢこめられてしまつたといふことを聞いたこともある。このやうに河童としての純粹さを失つた友だちが遠い國々で受けてゐる懲罰の笞がひとごとではなく白魚川の水底に残つてゐる河童たちのからだにも鞭をあてるごとくにひびいて來るのであつた。かれらは友だちが一日も早くこの清流に歸つて來ることを日夜願つてゐたのであるが、ひとたび出て行つた友だちはどうしたものか誰ひとり返つて來るものがなかつた。

或る日、暴あげくの雨水を上げしく落下させてゐた瀧からひとりの美しい人間の女が落ちて來た。きらびやかな衣装につつまれ、水々しい髪を結び、あでやかに化粧をほどこしてゐた若い娘は落下するとともにその生命を失ひ、流れのまにまに下流の方へ押しながされて行つた。河童たちは呆氣にとられ、ただぼんやりとその行方を見送つたのみである。ところがこのやうなことがそれから相ついで起つた。幾人もの若く美しい女が瀧壺に落ちて死んだ。後になると河童たちはそれらの女たちは決して自分で好んで瀧に落ちるのではなく、多くの人々から強要されてやむなく

水中に投じてゐるに違ひないと考へるやうになつた。河童たちはそれらの儀式を水面から首を出して眺めたことがある。そのおごそかな式はたいい暴が来て水が溢れ、さうして水がひいたあとに行はれるやうであつた。瀧の上に多くの人々があらはれ、色々の旗を立て、神主のやうな烏帽子水干姿の男が出て来てなにごとか長々と唱へる。瀧口のまうへには着飾つた若い娘がゐる。やがて娘は掌を合はせ眼を瞑ぢて瀧の中に飛びこむ。それはある時には水干姿の男によつて突きおとされたやうにも見えた。百二十尺もある瀧から落ちて生命のあらう苦がない。屍になつた若い娘は長い黒髪を水面にただよはし奔流にのせられてまたたく間に下流に見えなくなつてしまふ。ある時、河童たちは氣になる言葉を聞きとがめた。それは人間の言葉ではつきりとはわからなかつたが、なんでもそれはたしかに、ガラツバよ、汝の美しき花嫁をかはることなく、愛しめ、といふ意味に相違なかつたのである。河童たちは顔見合はせ首を捻つたけれども、どうしてもそのことの意味をさとることが出来なかつた。しかし、やがてその美しい娘が瀧から落ちることが止まつた時になつ

てはじめて河童たちは一切を理解した。それは、この地方をしはしは襲ふところの風雨はすべてガラツバ(河童のことをこの地方の人はさう呼んでゐた。)のせりである。そのたびに水害があるのはなにかガラツバの氣を損じてゐるからに違ひない。ガラツバにきれいな花嫁をあたへたなれば災を避けることが出来るであらう。そこで村中からもつとも美しい娘が選抜され瀧から身を棄てたのである。人々の犠牲となつて河童の花嫁となるといふやうな決心は若い娘にとつてはたぐひなく美しい浪漫精神であらうか。ともあれ、白魚川の河童たちはこのことを知るに及んで茫然となる思ひであつた。しかしそのことは間もなく止まつた。都から流されて来たひとで位高く情に満ちた人がこのことを中止させた。その人の名は和氣清麻呂といひ、その流鶯の寓居が瀧を真正面に望む山腹の杉林の中にあつた。この智慧のある人はこの儀式が良からぬ神主たちの陰謀であることを看破した。災をさめるための花嫁を買ふ金だといつて、近郷の人達から多くの金品を捲きあげてゐたのである。悪神主たちは和氣清麻呂のために瀧壺の上から落され、幾人もの花嫁たちが辿つたと

同じ運命に落ちた。彼等は瀧の上で和氣公から、お前たちがまづ行つてガラツバを迎へて來い、結婚式は水中で行ふ必要はない、といはれたのである。河童たちはこのやうな人間たちのいとなみによつてたいへんな迷惑を蒙つた。かれらの唯一の清潔な食餌である車蝦くるまえびの中で落ちて來た人間をつつくものが出てきて、河童たちがかれらを食餌とせんとする時に、はたしてその蝦がけがれてゐるか否かといふことを見きはめなければならぬやうな面倒を生じたからである。

このごろ瀧の上では奇妙なことが行はれる。瀧口のところに舞臺が組まれ、多くの人々が思ひ思ひの服装をしてその上で踊つたり歌つたりする。太鼓や笛や鉦の音がし、夜になると篝火かきびが焚かれ、舞臺を踏み鳴らすみだれた音が聞える。それから瀧の中に胡瓜や茄子や玉蜀黍などの野菜がしきりに投げこまれる。水面からちよつと顔を出してみるが、河童たちはつまらないのですぐに川底にかへつて寢ころんでしまふ。人間たちのすることが河童たちには腑に落ちない。これはガラツバ祭といふもので、暴あつちをしづめ水害を防ぐ目的をもつて、河童を慰め河童の心を和げるため

に行はれてゐるものだと聞いたこともある。さうして河童の好物である胡瓜や玉蜀黍を投げこむといふのである。河童たちは人間のいだいてゐる傳説にあきれる。暴風雨しんぷをこす自然の法則について河童たちはなにも知らない。また車蝦といふたぐひない食餌があるのに、生ぐさい胡瓜や茄子などがすこしも河童たちは好きではない。いろんなものを投げこむので水がよごれるばかりだ。瀧口の上の爲體たゐの知れない騒ぎはうるさくて仕方がない。河童たちはほとんど何日もの間つづけられるガラツバ祭の間、清流の底にふかく沈んで退屈し、砂の上に寢ころんで欠伸あくびばかりを連發してゐるのであつた。

月かげ

春の夜にかすむかすかな幕がしだいにひきあげられるやうに澄んで来ると、眼の色
の光りもまたおのづからことなるのである。空気のかんがへ方についても無關心
であることはできない。それは、自分の性の宿命によつて、背なかの甲羅のしめり
かたがちがひ、背がむづかゆくなつて、芋蟲のやうに、草のうへにあふむけにころ
がつて、ごろごろとところがる。青草にしめりがとられ、甲羅にちりばめた模様はや
うに草の葉が附着する。

絲のやうなながれが、峰からくだる谷間を縫つて、九十九折にながれる。名前の
ない、たれも名前をつけようとも考へたこともない、ささやかな流れである。絲は

ども細いが、河童が棲むのに不自由はない。一族のあるものは、路上にできた轡が
たの馬の足あとに雨水がたまつたのにさへ、三千匹は棲息することができる。

背に草の模様をつけた河童はそのながれを、電光のやうに上下する。からからと
奇妙な聲をたてながら疾走する。そのながれにたれかゝると探すのであるが、
たれもゐない。河童は何十度疾走しても、すこしも疲れないが、ただ、たれもゐな
い流れのしづけさに、たへがたい孤獨を感じる。ふと立ちどまり、腰に手をあてて、
空を仰ぐ。感傷といふものは、空の青さとともにいかなるところにもある。ただし、
泣くことは禁物だ。なぜなら、河童がひとたび涙を發すれば、二度ととまらず、こ
んこんとあふれいで、その青い涙は河童の生氣であるからして、涙の流出にしたが
つて、その河童の身體からはしだいに水分がなくなり、息ぐるしくなり、たちまち、
ぎちぎちと甲羅がひからび、こちこちになつて生命をうしなつてしまはねばならぬ
からだ。このやうなことは傳説として傳はつてゐるだけで、かれ自身もよくは知ら
ない。いちど泣けば生を終らねばならぬとすれば、このんで泣くものはない。河童

らは傳説をおそれて、生れおちるときから、泣かざることのみ訓練をした。泣けば涙とともに水分が消失してひからび果てるといふことが傳説であつたばかりでなく、泣くといふことすらが、いまは傳説となつた。かつて、昇天を志して、ことごとく天から落ちた河童らも、千軒岳のうへを飛翔して、火山のなかへ巻きこまれた河童らも、自分たちの運命が眼前に死を暗示してゐるときですら、泣くことはしなかつたのである。

絲のながれをいなづまのごとく走る河童も、たへがたい孤獨にとらはれ、空を仰ぎ、ふかい悲しみにとざされはしたが、けつして泣くことは考へなかつた。泣くことが心に浮ばないのだ。傳説の遠さといふものが、はるか郷愁のごとく、心のなかを去來する。そして、かなしいくせに、かれは、仕方なく笑ひだしてしまふのである。

あるとき、かれは、人間の居る里に出て、奇妙な運命に遭遇した。

かれは、茄子が好きなので、茄子がたくさん生つてゐるところへ、茄子を食べに出た。むらさきいろの、きろやかな、あるひはほそながい茄子の實が、きらきらとひかる。かれは、くつくつとうれしげに嘴を鳴らし、それをちぎる。しやきりと口のなかで爽やかな音がして、あますつばい水氣が舌をとほる。もうひとつちぎる。このときは、かれは孤獨の寂寥をわすれる。

すると、かれは、とつぜん、はげしい打擲を背に感じた。かれはその打撃のために、茄子の葉に頬をうちつけてたふれた。すると、背後でなにかけたたましく叫ぶ人間の聲をきいて、危険を感じ、いつさんに走りだした。かれはあわてふためき、絲のながれにきて、たちまち水中に没した。

なにごとが起つたのか。かれは、背の重味ををかしなことに思ひ、水にうつしてみた。すると、甲羅に、一本の鎌がつきたてられてゐた。百姓が自分の畠を荒しに來たものを懲らすために、鎌でうちかかつたものであらう。それが河童の甲羅につきささつたまま、抜けなかつたのだ。うしろに手のまはらない河童は困惑した。た

だ、甲羅にささつてゐるのみで、すこしも痛みはなかつたので、そのままにしておいた。

また、かれは茄子の畠に出る。茄子への誘惑はいかにしてもおさへることができない。ことに、月のある夜は、その茄子は寶石のごとく光る。すると、迂闊なかれはまたも畠の持ち主から、鎌をうちかけられ、おどろきあわてて、絲のながれに逃げかへつた。そのやうなことが、くりかへされた。暗愚なものは河童である。かれの孤獨の深さが茄子に變へられ、その哀傷が背にささる鎌の數とともに増した。いまは、背に八本の鎌を負うて、はじめて、かれは、自分のおろかさやに氣づいた。背にささつた八本の鎌のために、かれは歩行が困難になり、なにより、その肉體と大地との接觸を喪失した。かれは、自分の甲羅のしめりを草のうへにころがつてふきとることが、まつたくできなくなつたのである。かれが大地にあふむけにならうとすれば、つきたつた八本の鎌のうへに乗るほかはない。甲羅をとほしてゐないので痛みはないが、そのやうなたはけた恰好がどうしてできようか。かれはその羞恥に

耐へることができない。鎌はやがて錆び、その赤ちやけた汁が甲羅をよごす。もはや、かれは茄子をとりによく勇氣をもうしなひ、はじめて、悲しみの心がきざした。

月かげうつくしい絲のながれのほとりに出て、かれは、非常に悲しんだ。もういまは生きてゆく甲斐もない。かれは泣きたいと思つた。さうして泣かうとした。しかるに泣かざることの訓練によつて生きて来た身には、泣くことがいかなる方法によつて達せられるのか、見當もつかなかつた。ああ、泣きたい。しかし、悲しみによつてすぐに泣けると考へたことは、大なる認識不足であつた。泣きたいのに泣けないとは、なんと悲しいことであらうか。

月かげが山の端から中天に映つて来たときに、河童の眼にはじめて涙が浮いた。それは泣くことができない悲しみを感じたときに、泣くことができたからである。すると、傳説はつねに眞實をかたるものであることが、明瞭になつた。青い寶玉のごとくかれの眼にういた涙は、とめどなく、こんこんとあふれ、かれはしだいに水

分を失ひはじめたが、にもかかはらず、生を終つてゆく河童のくちばしには、かすかな微笑みが見られた。かれはいよいよひからびてゆき、水のほとりにたふれた。なほも、かれの眼からあふれいでる青い涙は、たれもみない緑のながれにそそぎ入り、水かさが増え、月光のもとに、燐のごとく、まつ青にきらめきつつ、せせらぎながれた。

昇天記

草の葉にまかれた生なまぐさい一通の手紙を私はひらく。

あしへいさん。

とつぜんの手紙であなたはおどろくかも知れんが、わたしは、白魚川しろうがはの底に棲んでゐる河童です。古くは、芥川龍之介さんや、小川芋銭さん、今では、原田種夫さんや、あなたがわれわれ河童のよき理解者であり、知己であることは、われわれ河童仲間でも常に話題の種であり、また、うれしくも思つてゐることです。そこで、いろいろとお話したいこともたくさんあるのですが、それはまたの機会にして、

賞は今日は、あなたに、わたしの書いた小説を讀んでもらひたいと思つて、手紙をさしあげた次第です。われわれ河童の文章といふものは、天草の川にゐたゲタルといふものが江戸時代に創始した文體以來、少しも進歩してゐないので、あなたにはこの原稿が讀みにくいかも知れんが、まあ、ひとつ、讀んで下さい。

小「昇天記」

昔のことでおぢやる。白魚川しろうがはとなん水のながれに、河童ども、たむろなし、くくむなし、もどろなしつつ、あまた棲んでゐたと申す。

はやばしる流れにいでて浮ういつ沈しづうつ、昇のぼつつ降くだつつ、嘴くち鳴らし、眼まなこきやらせ、夜晝よじゅうを分わかたず、戯あそれておつたところで、或るとき、ひとりの河童の、仔細らしう申すは、われら、つね日頃、水のながれにあれど陸りくにもあがり、陸りくの始終はよほど見

あいた、すでに珍らしう心ざがること御座ない、ただ、われら望むことは天空の世界にのぼらんことぢや、もろもろのはなしや、書かき、天のこと、いららしく、うちくしく、いと崇高けいごうに書きあらはいてござる、また、龍も年を経つて位ゐのほれば昇天するためし、われら河童といへど、など昇天の機はかりの無からうずる筈はおさない、この儀はなんと、と、いへば、並ならぶ河童ども口を揃へて、その儀異議あるはない、賛成さんせい賛成さんせい、と叫こゑき、また、なめならず喜よろこうだ。さうあるところで、ひとりの河童、昇天のこと、われら分別はしたれど、そのやうに目算めざもなう、ざつといひだいて、はたして然らば、空かける手段てだてはいかに、われら水にすみ、地に潜ひそむことは知れど、空飛そばす術すべは知らぬ、このことなくばおのおの昇天の儀も、種まかずして柿かきの生るを待つと同然ぢや、とあれば、いひだいたる河童も明あらめ申すこともかなはで、顔よごいて、とちめき、噤つぶすんだ。河原かはらに市いちをないたる河童ども、顔見合はせ、ひたすらどしめくによつて、更に效驗かうけんのあらうやうはおさない。この時、また、ひとりの河童、高聲かうせいに叫こゑきて申すは、昇天ののぞみ絶ちがたけれど、

空飛ばす術知らぬわれらがいかにかに論定するも詮ないことでおぢやる、聞くところに依れば、千軒岳に集まふ河童たちは、いかがして會得したるにや、自由に飛行をなすと聞えた、これに就いてその術を習得するが肝要と思うがどうぢや。これを聞いて集るもの、ことごとくその議にまかなひ、一定した。

さうあるところで、この土地の寶生などあまた賁なして、千軒岳なる河童を飛行の師に頼うだ。師の河童よう心得、それよりは夜晝を分たず、河原に群衆して、飛行の術を傳授することぢや。飛行のこと習はんと出で立つもの限りもなうて河原に市をないた。抑、食ふるものからして異なるに依つて、先づ、あまたの腹下しを出だいた。そぢやいげと申す木の根の腐らいたるを三升がほども一日に嚙み干すことは、え叶はいで、もはや昇天の心失せぬと思ひさだめたる河童もあつた。稱ふる呪文は、ぼね、おぶ、うん、ぐる、さん、みとぼ、えしてぶ、くねる、あんね、と申す。こは昇天の途次、危害を加ふる雷神を防がうずる氣配といふことぢや。この呪文どうしても覺ゆること得せ、河童もおぢやつたといふは曲もないことぢや。さ

て、師の河童おぞがらい者にて、聲高に叫べば山呼おこり、葦の鞭振らへば風おこり、なかなかに籠者しやうものもおぞない。さうあるところで、あまたの河童、長月の修行の甲斐あつて、昇天の術を漸くにて習得したと申す。

されば練習が肝要なりとて、ことさらに鋭な岩のあたりに群衆して、月の出づるを待つて飛うだ。呪文を間違へれば、われは飛行する目算なるが、ただ陸ばかりを走りぢだめく。少し飛うだるが、中途よりべらんと落ち放いて甲羅を打ち挫き、足を折る。昇つつ、降つつ、おひやらめき、くくひなし、叫きあらび、その仰らしいありさまは寔響を取るに例もないほどであつたと申す。師の河童は高座にありて葦を振らひ、山呼する高聲にて、寒らひはためいておつたといふことぢや。

かやうの次第によつて、いよいよ難行苦難の果に、漸く飛行の途を得たれば、師の河童は千軒岳に去んだ。さて、吉日を撰うでいよいよ昇天することに一定した。河童ども喜びはためき、市をないて集り、どしめき、或る者は一念の叶ひたるをさがんで、泣く者も少々ではなくおぢやつたと申す。

さて、初め昇天の儀を申しいだいたる河童の音頭をもつて飛び出だいた。それは數も知らぬあまたの蜻蛉が群ないて飛ぶに似ておつたといふことぢや。満月のきららめく空の上にひゆうひゆうと鳴りはためいて、あまたの河童は瞬きする間もなく、消えていつたと申す。

白魚川の河原には不甲斐あらず、呪文を憶ゆることを得せぬ河童、修行の中途にて甲羅を打ち挫き、或は足を折りたる河童など、すこうしゐて、友達の昇天するを眺め羨んでおつた。これどもの申すやうは、われらは陸にて生を終らうずること、曲もなう、どぐめきことなれど、詮ないことなれば分別あれかし、とて、水を破りて沈うだ。

然るに、二三日を経つた後のことでおぢやる。河原の岩に異形の音を放いて落ちたと思ふに、何かはよからう、忽ちに命果てた者がおぢやつた。流の底に眠らうて居つた河童、仰天し、いで立ちて觀るに、少し前に昇天した河童の一人ぢや。既に甲羅も潰れ、頭の皿は干て、嘴も挫けて飛うだれば、命あらうやうもおぢない。その

實否はいかにも怪しう思ひ居る折柄、又しても、物の落つる氣配して、どりと落ちたものがあつた。それも先頃昇天したる河童ぢや。これもたまらず果てた。何たる籠者かと驚き入るところで、それより次々に落ちる者數を知らぬありさまぢや。後ほどは果つる者は數を減らいたが、天より歸り來る河童は、どれやうも、悉く、色青さめ、くばめき、ひなびき、河原に下りる時より、噤すんで阿呆のやうにおぢやる。いかやうなことかと問ひかくるも、物數いへる者がおぢない。されば、流れの水を汲うで打ちかくるに漸くに眼をくりまき、嘴をわらかす始末ぢや。次に、一段と高聲に叫いても何も聞えぬ始末ぢや。又、息吹き返した後に、果つるもあり、氣狂ひたるごとく、異形の聲を發して陸を這ひぢだめくもある。流れに飛び込で、われは河童の生なるに、溺れて果つるもある。打ち倒れて落ち窪うだ兩つの眼ばかりぎゆるめかすもある。その惨忍のありさまは、寔、譬をとるに例もないほどであつたと申す。

水を皿にかくれば、漸くに口を開くものがいだいたれば、仔細をきくにかうぢや。

おのおの喜び勇うて昇天はしたが、高う上るにつれて、何處まで飛うでも空ばかりで何もおさない。高う高ううち連れて上るところで、腹は減る。寒さはいごい。それでも飛ぶうちに、夜さが明け、また日が暮れ、何日も飛うだ。なんぼ高う上つても何もおさないのは一つぢや。されば遂に力竭き果つる者が落ちた。力の残る者は我慢強う昇つて行つたが、いづれまで上つても、何もないのは必定ぢや。考へもなう不埒のことをして退けた、といふ次第でおぢやる。

さればこの時あつてから後、白魚川の眷族は、飛行の術をえ覚えぬ愚の河童ばかりとなりたと申す。

どうです。あしへいさん。傑作ではありませんかね。ひとつ、この「昇天記」で、芥川賞をもらつて下さい。

水 紋

曇つた日にはよくわからないが、晴れた日に、川の水面を透かしてみると、恰度、一錢白銅を浮べたやうに、そこだけ丸く光つてゐる部分のあることに氣づくことがある。それはひとつの場合もあり、數個のときもあり、また、あられ模様のやうに數をかぞへることのできない折もある。また、さめ小紋に似てあまり密集してゐるので、かへつて、それと氣づかないことも珍らしくない。なほ、よく氣をつけてみると、それは小さい渦のやうに、つねに廻つてゐる。さういふものを、水面に認め、た場合には、その下に河童が居るものと考へてよい。しかし、河童が水中に居れば、そのまうへの水面にさういふ標識があらはれるといふことは、河童自身は知らない

のである。もつとも、すべての河童がさうであるといふのではなく、種族によつてはその標識をあらはさないものもある。河童は種族によつてその出生の歴史を異にしてゐることは周知のことであるが、その水紋をあらはすものは、概して出のよい種族の場合が多い。壇の浦に沈んで亡びた平家の末裔が、男は蟹となり女は河童となつたことは有名な話であるが、われわれは關門海峡の水面にこの水紋を発見することはたびたびである。

ところで、あるとき、小倉にある陸軍橋からすこし上流の紫川の水面に、二十よりは少ない水紋がゆるやかに舞ひながら、冬には珍らしく晴れわたつた太陽の光を受けて、鈍銀色に光つてゐた。しかしながら、橋を通る人も、岸を通る人も、たれひとりそれに注意する者はなく、そればかりではなく、さつきから傳馬船や、筏などがその水紋のうへを何度も往き來した。そこは川がすこし曲つてゐるところで、水流のあたる部分が深く底を掘り、淵のやうになつてゐる個所だ。そこへ、さつきから水紋と同じ數の河童たちが集まつて、熱心になにか語り、とがつた嘴を鳴

らしては悲しんだり、怒つたり、笑つたりしてゐた。

まづ、彼等は自分たちの望みのかなはないことがなによりも遺憾に耐へぬ風であつた。彼等は地上で起つてゐることに對して、じつとしてゐることができず。自分たちもその闘ひに参加したいことを念願したのであるが實現されなかつた。彼等は傳説による祖先の光榮を自負して、いささかの疑義もなく、現在の神話に參畫できることを信じたのであつたが、その希望は達せられなかつたのである。

何日か前に彼等のうちの思慮と勇氣とを有するものが提議した。

「いま、地上では壯大な戦争が始まつてゐる。これは昔、この國ができるときに行はれた神話が、新しい規模をもつて、ふたたび始められたに外ならぬ。われわれもこの國に棲む河童として、是が非でもこの神聖な戦ひに参加したい。きつと役に立つことができるに相違ない。われわれは傷を癒す術はもちろん、手足の落ちたのをつぐこともできる。またもつとも得意とする水中遊弋によつて敵の部隊や艦隊の動勢をさぐり、また、そのほかのいかなる情報をも手に入れることができる。日清、

日露の兩役には屋島に棲む九十六匹の狸が出陣して、功をあらはしたことも聞いてゐる。下賤なる狸ですらさうであるから、われわれがじつとしてゐるわけにはゆかない。われわれは落ちぶれたりとはいへ、祖先の名はあきらかに古事記にその名をとどめられてゐるのだ。山田の曾富騰といへば、もとは山や田や水を治める神であつた。残念にも、子孫に心がけのよくないものが居つたために、山中では山わろになり、水中では河童になつたが、それはわれわれとはまつたく關係のないことだ。われわれは、心のなかではすこしも古事記の尊嚴を失つてゐないと確信してゐる。出陣をしよう。そして、大いに闘はう。」

ところが、彼等の希望はそのさかんなる意氣込みにもかかはらず實現しなかつた。彼等の代表が軍に申し出たところ、その志は壯とし協力の意は謝すも、日本軍は力が足りなくて河童の應援まで受けたと思はれたくない、といふ理由で拒絶されたのである。それが、河童たちが悲しんでゐたわけである。

おこつてゐたのは、このごろ、怪しい形のもものが水中を徘徊して水をにごすとい

ふのである。それは極く最近気づいたことであるが、このごろ、嘗て知らなかつた異様の鳴き聲をととき聞く。河童の聲はふたつの皿をたたくときに出る音に似てゐるのであるが、その聞きなれぬ聲は、恰度、二本の木の枝をゆるくかち合はしたときの音に似てゐて、鈍重で、卑屈に聞える。その正體をはじめは見たものがなかつたが、やがて、あるとき、勇敢な河童がしきりに異様な調子で鳴いてゐる聲をたよりに近づいていつてそれを捕へた。

水面から光の透して來ない水底に、岩や木屑や竹片などの堆積した場所がある。さういふところに好んでその怪しい形のもものは潜んでゐる。彼等はひつそりと靜まりかへつてはゐるのであるが、どうしたものか、しきりににぶい聲で鳴く。いくら隠れてゐても、聲を立てればそのありかがわかるのに、生れつき暗黒なのか、また鳴かすには居られないのか、鳴く。そして、たれかが近づく氣配がすると、あわてて逃げだす。さういふ風に、暗いところばかりに居て、臆病に逃げ廻ることを仕事にしてゐるので、その姿を明瞭に見たものがない。ただ、咄嗟に見た印象で、變て

こな形のものであることだけはわかる。紫川の河童たちの間では、この怪しい闖入者が問題になり、時局柄、棄ておけないと云ふことになった。

そのとき、遂に捕へられたものはげしい聲で鳴きわめいた。彼のながす涙は水中に二本の青い帯をながしたやうに、下流の方へのびていつた。龜に似た身體に、棕櫚のやうに長い毛を生やし、蛙のやうに臍のない褐色の腹をあふむけにして、短い手足をばたばたさせた。嘴は信天翁に似、眼は深い毛にかくれて、どこにあるかわからなかつた。しかし、それがやはり河童にちがひないことだけは、頭に皿のあることによつて理解できたのである。

やがて、謎がとけた。これらの怪しい恰好の河童たちは、どこか、遠い南の方から移住して来たのであつた。それは、南の方ではげしい戦争が始まつて、身邊が危険になつて来たからである。彼等は安全地帯をもとめて右往左往し、つひに、この邊の川や沼や海に落ちついた。移住の途中でも、あるものは弾丸や爆弾にあたつて死に、あるものはあわてふためいて戦車に衝突してたふれた。長い恐しい旅であつ

た。彼等はまつたく一身の安全のために平穩の地を求めてやつて来たのであつて、なんら他意はなかつたのである。

紫川の河童たちはこの寄るべない南方の河童たちを輕蔑した。同情するやうになつたのは、ずつと後のことである。輕蔑したのはその勇氣のなさと、自分のことより外にはなににも考へない態度に對してである。彼等も南方の國に棲んでゐたものであれば、何故、南方の國のために闘はないのか。その土地と運命をともにしないか。さう考へたのだ。しかし、よく考へてみると、彼等が闘つて殉すべき國を持つてゐなかつたことがわかつた。彼等が生れ育つたところは、彼等が祖先となんの關係もない者によつて犯されてゐる。遠くから来た皮膚の白い人間たちが、暴力と金力とをもつて、南方の島々を自由にしてゐたのだ。いかに河童が暗愚とはいへ、それらの者のために闘ふことができようか。さう聞けばさうである。はじめ輕蔑した紫川の河童たちも、のちにはさう思ふやうになつた。

ところが、この氣の毒な遠來の河童たちの態度は、紫川の河童たちの考へが變つ

てからも、すこしも變ることがなかつた。相かはらず陽の透さぬ場所にひそみ、癪になつたやうに鈍い聲で鳴き、ちよつとの物音にも逃げだしてゆく。これが紫川の河童たちが笑つてゐたわけである。

やがて、話しつかれた河童たちがその淀みの淵から出て、別れてゆくと、陽のあかるい水面を多くの鈍銀色の水紋が、風にふき散らされる花びらのやうに、散つていつた。

歴 史

著者略歴 早稻田大學英文科中退。
昭和十二年支那專使に隨召、爾後屢々從軍。
今次大東亞戰爭には比島作戰に陸軍報道班員として從軍。
著作「麥と兵隊」「土と兵隊」「花と兵隊」等

出 文 協 承 認
い 30496



(真 銅丁 密了村之藝術は早稲田版権商標)

昭和十八年五月十五日印刷 (二萬部)
昭和十八年五月二十日發行

定 價 二 圓

著 者 火 野 葦 平

發行者 鐵 村 大 二

東京市神田區須田町二ノ一七

印刷者 川 瀬 朝 次 郎

小石川區瀧日本道町二八

發行所 株式會社 生 活 社

東京市神田區須田町二ノ一七

東京市神田區須田町二ノ一七

東京市神田區須田町二ノ一七

電話 渡 花 (一六四一四番)

印刷・川瀬印刷所

(東京一四〇)

配給元 日本出版配給株式會社

東京市神田區須田町二ノ一七

中山義秀

お花畑

價・二、〇〇
円・廿五

人間慈愛に充ちた著者の人生觀照の深奥から麗しく咲き出た短篇集。生きる人間ののつびきならぬ實相の中に見出した美のお花畑。

芝木好子

旅立ち

價・二、〇〇
円・廿五

戦ふ日の厳しさの中にも、人を想ひ、結婚してゆかるとする若い日の心を描く。眞に現今戦時下の若き男女の結婚の書。

尾崎士郎

烽煙

價・二、〇〇
円・廿五

パタアン作戦に従軍した著者が、その全貌を展開しつつ、戦場心理の變化に取材し、深まり行く人間關係、战友同志の友愛を描く。

生活社刊

終